

# 広島県下の小さなゴールドラッシュ

高島 清

本年9月 広島駐在員事務所長として赴任された青柳技官から 興味あるニュースを伝えて来たのが 11月末のことであった。 その話とは 中国地方には珍しく有望な金鉱床が発見され 現在までに相当の量の高品位珪酸鉱が 日比製錬所に出荷され かつ その金鉱を採掘しているのが 鉱業に全く関係のなかった 付近のお百姓さんだということだったのだから 私たちが驚いたのも無理もない話であった。

早速 現状と資料の収集をかねて 現地に出かけ 鉱山の経営者であるお百姓さんから 発見に至るまでの苦心談を聞き また付近の地質 鉱床調査を行ってきたので 簡単にその概要を読者諸兄にお知らせする。

この発見された金山の名称は 甲山(かぶとやま) 鉱山と名付けられており その場所は 広島県深安郡加茂町広瀬地区内にあり 福山市から真北 直線距離にして約20kmの山中にある。 この現場に行くには 福山市から 山野行バスと 広瀬行バスの便があるが 鉱山の現場に行くには 広瀬行バスの便を利用するのが都合が良いようである。 ただし一日2往復。 しかし 鉱石運搬のためには 非常に都合のよい県道が山下にあり 岡山県日比製錬所まで鉱石を直送して その運賃は1100円/トン という。

## 鉱業権者 三島寛一氏が話題の人

同氏から 現在の金鉱を探し出すまでの 苦心談を聞くと なかなか興味のある話であった。

三島氏の本職は農業であった。 しかし いろいろの面で 研究心がおう盛で 農業のみならず あらゆる面で いろいろの研究を行ってきたとの事である。

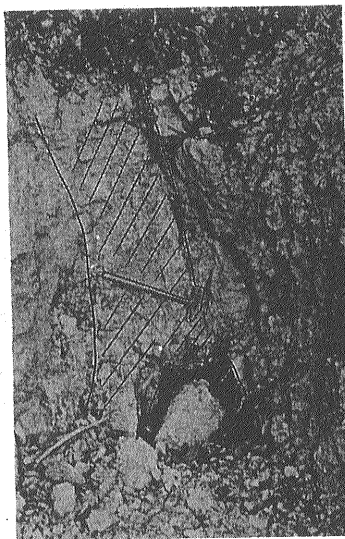
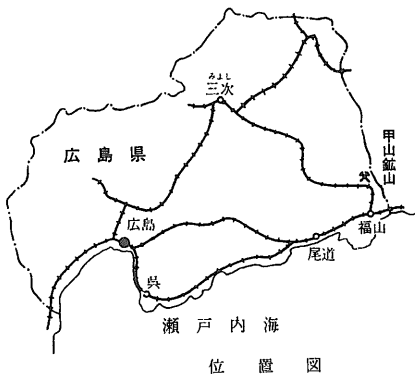
とくに 鉱山に対しては非常に強い興味をもち 田畑を耕やす余暇をみて 見たり 聞いたりする耳学問をたよりに 石灰石 ロー石 粘土などの白い石に興味をもち 付近の山野を歩き回ったという。

また 昭和24年 終戦の傷まだいえやらぬころ これらの鉱石を粉砕し 風簸選鉱してみたり また 焼いたりして実験を行なってみたそうであるが あまり 成果を上げることはできなかったという。

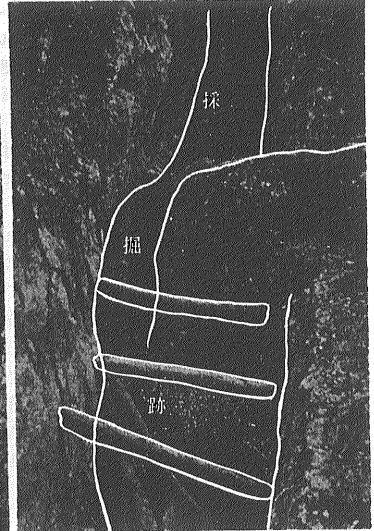
昭和28年頃 勝光山の例をみて ロー石鉱床を探して歩いてた折 矢川の人から 最近できたばかりの校庭の裏に 白い脈があることを聞き ロー石質と関係のあるものかもわからないと思い 行って調べたところ 石英脈であった。 石英脈であれば 何か金属分があるかもしれないと思ったので 広島の造幣局に持参したところ金が含まれているかもしれないといわれ 分析したそうである。 この際の分析品位は 含金量位 3g/トンであった。 これでは まだ価値の少ないものであるので 付近を調べ 再度試料をとり 分析したところ 含金量位 4g/トン であったという。

これに意を得て 数年間にわたり付近の山野を抜渉し 数10コの試料を採取し 広島造幣局において分析したという。

昭和38年8月 造幣局からの報告に 含金量位 19g/トン 含銀品位11g/トンのものがあり これに元気づけられ 現在の露頭を発見した。 最初の分析では 含金量位 117.0g/トン および78.5g/トンの値を示した。



一号脈上部露頭



一号脈上部採掘跡



甲山鉾山で働いている付近のお百姓さんたち ○印は鉾業者の三島寛一さん

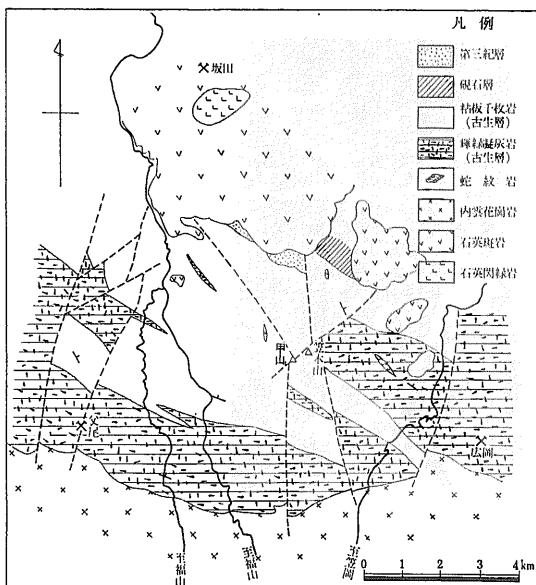
ここで はじめて試掘出願をして 鉾石を採掘する計画を立てたというのが 当時としても なお 広島県下の鉾業界の人々は 半信半疑であったという。

三島氏は「私が 鉾石や鉾山に興味をもち かん心が あったのは 少年時代からの環境にあった。 明治初年 三谷地区の広岡鉾山を発見した熊谷某という人がいた。 その人は当時の金にして4万5千円の大金で鉾区を売った。 当時の一日の人夫賃が20~30銭であったところを みても相当な金額であったことが想像される。

この金の一部 1000円を村に寄付して建てられたのが 私の通った上野小学校であった。 したがって 先生の話などにも その話がよく出ていた。

九州で石炭鉾業をやり 成功をおさめた 時本某も この上野小学校出身であり その他 鉾山をやって成功したり 失敗した人の数も少なくなかった。

私も成功すれば 地元の発展のために力を入れたい」と語っている。

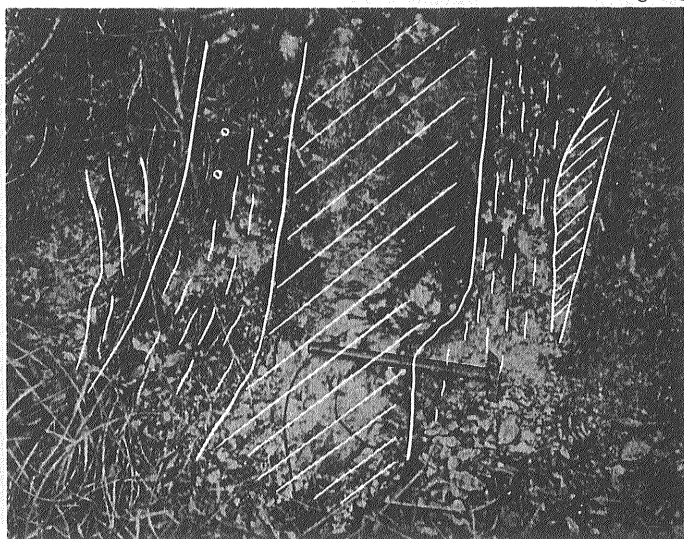


甲山鉾山周辺地質概略図

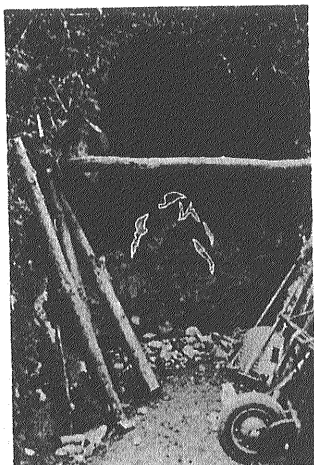
### 甲山鉾山の地質鉾床

地質 古生層 千枚質粘板岩 粘板岩 輝緑凝灰岩などの累層より構成されている。 粘板岩類は黒色~灰黒色 緻密で 部分的に 千枚質になったり 珪化 アジノール化を呈し また局部的に石墨化部分もみられる。 全般的には塊状 無層理の部分が多いようである。 輝緑凝灰岩は淡緑色 無層理の部分が多く 部分的に方解石脈の網状部が認められる。 火成岩としては 古生層中の侵入岩体として閃雲花崗岩 石英斑岩などが分布している。

地質 構造 古生層の走向 傾斜NWW—SEE 50°±NEE の単斜構造を示している。 断層はNS系のもものと NEE—SWW系のものが優勢で 鉾床はこ



三号脈露頭 破砕帯を含めて幅1m以上の露頭である 石英脈は母岩は千枚質粘板岩に輝緑凝灰岩の鉾石が認められる



三坑々口  
一輪車で 鉱石や研  
の運搬を行なってい  
る 母岩は輝緑凝  
灰岩で 白色石英の  
網状部が認められる  
約25mで富鉱部に達  
する予定

の種断層系の集中部にみられる。

北部 6kmの位置に 石英斑岩の大きな分布が知られ 砒素を伴うことで 有名な坂田鉱山はこの中に胚胎している。南部 5～6kmの位置には閃雲花崗岩(広島型)の広大な分布があり 古生層はこの両者の中間に挟まれた形で 分布している。

父尾 鉱山 広岡 鉱山 等の銅鉱床はこの花崗岩体 近くに 古生層中の銅鉱脈として胚胎している。

付近に分布する鉱床は ほぼ この火成岩体の進入に 関係をもって できたことが予想される。

この地域一帯の鉱石の特長からみると 砒素の含有が 多く 硫砒鉄鉱を主とする鉱脈がよく知られており 坂田 鉱山や築瀬 鉱山などでは 大正10年から13年頃まで 盛んに採鉱が行なわれ 農薬としての重砒酸の製造が行なわれたことが知られている。

また 広岡 廣瀬 吉井 井原などのように古生層中の銅鉱脈として 探鉱 採鉱が行なわれたことも 古くから知られているが 一般的に閃亜鉛鉱 方鉛鉱および 黄鉄鉱の混在する雑鉱型の鉱石で 選鉱製錬などの技術的水準の低かった当時として 大規模な採鉱は行われな

かったようである。 さらに このような鉱石に加えて 鉱脈そのものも 幅30cm 前後の狭いものが多く かつ 膨縮の著しい鉱況からみて 探鉱に苦しんだように考えられる。

しかし 明治40年頃 開発が行なわれた広岡 鉱山は 古生層中の鉱脈で その走向 EW方向に 350m 稼行され また 下部にも 150mまで採掘が進められた。

当時の状況として 平均脈幅 1m 最大幅 6mを示し 含有鉱物として 黄銅鉱 黄鉄鉱を主とし 少量の方鉛 鉱を含んでいたといわれる。 当時の品位は Au 5g/ トン Cu 4% を示し 大正14年には 年産 59,483 トンを生産したと記録されている。

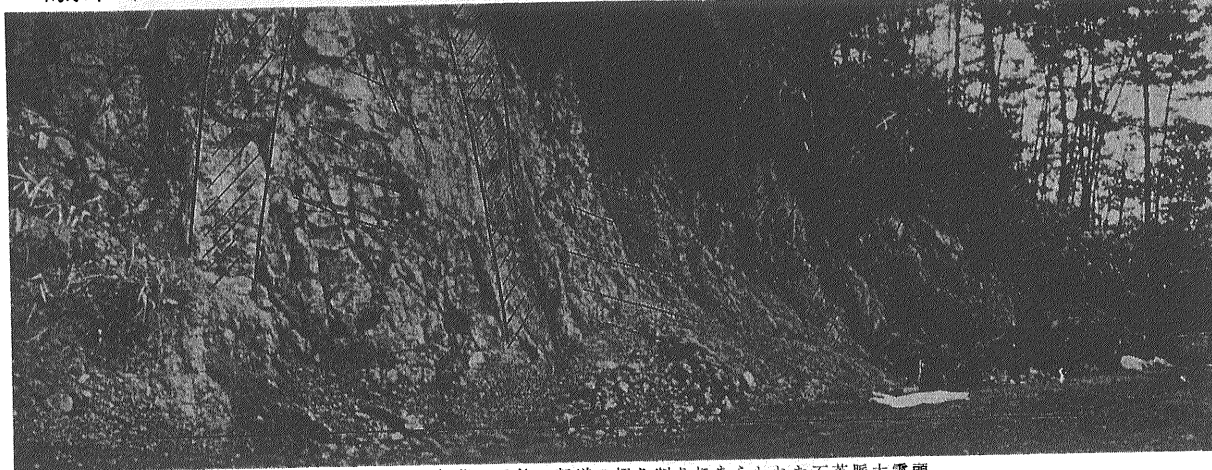
広瀬 鉱山においても 同様で 走向 N70°Wの方向に 数100m探鉱され また 下部 120mまで 開発が行なわれ 平均して 狭小な鉱脈の中に あっても 比較的大きく稼行された鉱山であるとの記録もある。

しかし この場合でも 雑鉱型であるため 選鉱 製錬上の不利は まぬがれず 休山をしたまま 現在に至っている。 開発当時の状況では 地表露頭部では 約 20mの間 輝銅鉱 孔雀石を主とする土状鉱が 胚胎し 銅品位 Cu20%を示したこともあるといわれている。

このように数多くの鉱床が分布する地帯であったが 肉眼的に自然金の認められない石英脈は じゅうぶんに 探鉱が 行なわれなかったようである。

これらの鉱床の分布からみると 火成岩体からの距離 的な関係をもって 高温型の鉱物から 低温型の鉱物へ の変化 すなわち 鉱石鉱物の異帯分布を研究するには 好適の場所であり また これによって新しい鉱床の発見も十分に期待される。

甲山 鉱山の鉱床は 古生層中の断層性裂罅中に胚胎される 裂罅充填性の含金石英脈である。 現在 稼行されている鉱脈は 1号脈で その方向は N20°E 傾斜 70° E で 母岩の千枚質粘板岩の走向 N55°W～EW 傾斜 30°～60°N を示す地層面を切り 鉱脈の膨縮も著し



鉱区の西部菅町部落 手前の新道の切り割りにあらわれた石英脈大露頭

い。

その肥大部は 脈幅 2 mにも達するが 平均して30cm内外である。 現在稼行中のロー坑 一坑 二坑はいずれも同一鉱脈である 1号脈を稼行しており 探鉱され出鉱された走向方向の延長は 三坑立入予定部まで含めて約 100 mである。 ただし 富鉱部の延長は30m内外と考えられ その富鉱体の落しは 地形の傾斜によりやや急な形で 現在開口予定中の三坑水準まで達すると考えられる。 三坑とロー坑との高低差は40mである。 現在 2号脈に対して立入が行なわれており 鉱区内には数多くの石英脈 露頭が分布しているので 今後の探鉱が期待される。

鉱石は白色緻密質の珪酸鉱で その珪酸分は85~95%を示し 含金量の良いものはやや 脂肪感があり 氷長石の含有も予想される。

一般には塊状で 角礫質部 粘土質部を伴うものは概して低品位である。 ただし 露頭部では 弱い褐鉄鉱化の褐色汚染がみられるが 肉眼的には 石英脈中に黄鉄鉱をはじめとして硫化鉱物の認められることが少ない。

ただし 角礫質部 粘土質部には若干の黄鉄鉱が鉱染し また母岩中には少量の黄鉄鉱の鉱染が認められる。 含金量の割に椀かけによっても 肉眼的に自然金を確認することはむずかしく 金粒は非常に細かいことが予想される。

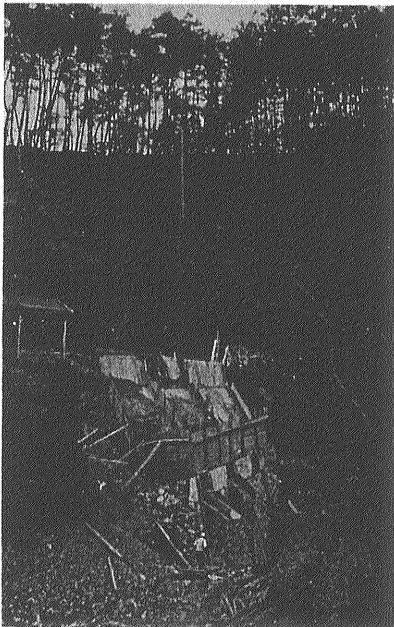
現況 現在従業員17人で 昭和38年12月から 昭和39年10月までの間稼行し 出鉱量 497.4トン 品位 Au 22.6 g/トン Ag23.0 g/トン である。 10月の出鉱量は 78トンで品位 Au37.0 g/トン Ag36.0 g/トン である。 なお現在坑内外を合せて 貯鉱量約70トンあり 現況でも月平均70トンから100トンの出鉱は可能と考えられる。

この鉱山が稼行されてから 付近の鉱山熱は除々に高まり 最初は マユツパ物と考えていた付近の人々 業界の人々も 広島県下 広くは中国地方全域に このような盲点があることを改めて 見なおしている。

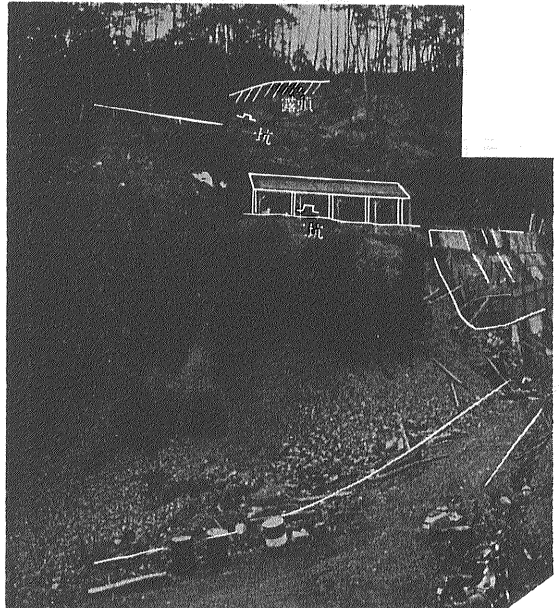
今後の調査研究も 最近の地質 鉱床学の面の進歩と 考え合わせて この様な盲点をなくするよう組織的に進められんことを要望する次第である。 (筆者は鉱床部)



まだ地下に多量の金鉱がねわっているとおもわれる広瀬地内の山間部 矢印の丸い丘状の山には 無数の網状石英脈が分布している 右手の山の裏側に甲山鉱山がある 地質は古生層の千枚質粘板岩 一部は輝緑凝灰岩からなる



鉱石積み込みのためつくられた 鉱石シュート



甲山鉱山の全景 天幕ばりの小屋は二坑口につくられた 簡易手選鉱場 下の道路は左側の県道に通じている